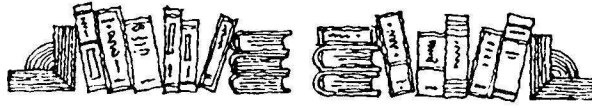


国語国文学会だより



No. 42

日本文学科卒業生の会

2010. 4

国語国文学会 平成二十一年度秋季大会 研究発表・講演会 報告

平成二十一年度秋季大会を十二月五日（土）、百年館低層棟五〇五教室にて開催しました。

◆午前の部（研究発表会）十時～十二時

・鮎釣り譚

本学博士課程後期三年次 岩田芳子氏

・大江健三郎『僕が本当に若かった頃』論

——二人の〈家庭教師〉の仕事を中心として

本学博士課程後期三年次 鈴木恵美氏

・夢野久作の〈童話〉

——探偵小説作家以前の夢想

本学学術研究員 伊藤里和氏

◆午後の部（講演会）十三時三十分～十六時三十分

・中国はいかにして中国になったか？

本学教授 谷中信一氏

・詩がうまれるとき

詩人・童話作家 工藤直子氏

懇親会 十六時四十五分～十八時十五分

於 七十年館生協食堂

講演記録（抜粋）

「詩がうまれるとき」

詩人・童話作家 工藤 直子

…（略）…今日は全然他のところで話すのと別のこと話してる。やっぱり図書館とか、小中学校の先生とはまた違うんだね。気配がね。人生訓みたいなこと話してるよ。あ、ついでに言っておこう。あのね、おまじないで生きてきました。で、その、編集者の人がこの間面白がって「そのおまじないで本書いて、エッセイ書いてよ」と言われたんですけども、「エッセイじゃなくてフィクションがいい」って言い倒しているものですよ。それからあれですけども。あのね、中学校のときに、自分が使っていたおまじないが二つあります。一つが、「水金地火木」ってやるやつです。今ね、冥王星がもうへちゃんになりましたけど、あの時は「水金地火木土天海冥」って言っていました。で、ある時期、冥王星がこっちへ来たから「土天冥海」になったんですけど。「水金地火木」ってやるのは、もうじたばたして、だめな時、眠れない時に、自分からイメージ離していくんです。その時は滋賀県にいたから、どんどんどんどん屋根から出て、どんどんどんどん行くと、どんどん彦根っていうところがあるんですけど、彦根の町だよこれは、どんどん、あつ、琵琶湖があつて、どんどん、あつ、日本があつて、あの頃はパソコンもなきや何もないから自分の中のイメージだけなんですけどね。それで月を超え、水、金、地、火、木、土、天、海、冥王星って行ったことないけどこら辺かな、みたいな所へ行くんですね。イメージの中で。そうするとね、なんぼのもんじゃいつていう感じになるんですよ。こんな直子のうだうだは、ここから見たらなんぼのも

んじやいってなつて、安心してつていう、そんなおまじないです。でもこれははまるとね、すごく飛びやすいんですよ。一気に行くんですね。でもね、あんまり怖いんです。ええ、誰もいない！みたいな感じになりますけど、でも結構それ好きです。それともう一個は、誰もいないときに、自分で鏡を覗き込んで、自分に向かって「がんばれ、あたしがついているんだから」っていうふうに言う。つまり、誰もいなくても、私が私の友達なんだから、死ぬまで、つて思うんですね。で、思ひ方変えとね、いいもん！つていう感じになったんですよ。だから、実は『のはらうた』なんかは結構そういう自分のいろんな気持を出しています。確かね、おまじない、もろ「おまじない」つていうタイトルで、「みみずみつお君」に言わせてます。覚えてるかな、

こわいとき となえる
おまじないがある
じぶんむかつかつて
こういうんだ
「おい、ぼくよ
ぼくがいるから
だいじようぶ
ぼくがいるから
だいじようぶ」



講演中の工藤直子氏

すると
ぼくがふたりいるみたいで
げんきになる
というものです。結構そんな気がしているんですよ。それでね、青春というか、ちょうど大学生時代から、

博報堂の社会人のペーパーの時、もう一番使い倒したセリフがあります、「やったことは、やりたかったこと。やらなかったことは、やりたくなかったこと」。もうね、どれだけ助けられたか。つまりもう、やつちまったことに關してはもう、やりたかったんだつてちゃんと受け止めるべえつていう感じですね。それで、やれなかったことについては、それはお前がやりたくなかっただけじゃない。結構これは、効きました。そのあとはいろいろあるんですけども、まあよくあるやつですね、「片付けなくたって死にやせん」とかね。だんだん言い訳が多くなつてきますね。「三百六十度、どっちに向かつてもう一歩目だよ」つていうのもあります。つまり、これが後ろ向きつて思わないつもりでね。私が字書いているからもう他のはやれないつていうんじゃない、なんでも始めりやいいじゃん、みたいな気のときには、「三百六十度」を使います。

一番たぶん『のはらうた』を書いているつていうのは、言ってみやあ、お日様が友達だい、みたいな感じがあるんですよ。つまり誰がいなくても、実は私は自然だけじゃなく、雲も空も虹も、親戚付き合いの気です。だからこういう詩を書いているんだと思いますけども、テーブルとかコップとか、こういうものも友達の間でいるんですね。こちら辺が、妄想と空想の微妙な違いですね。危なくすると妄想になります。でも、妄想が空想であるときは、うんと力になりますね。だから、さっきの「初めて出会う、その会い方で会い続ける」なんていうのも、認知と同じですよ。どちら様でしたっけ？つていうのと同じですからね。だから、両面あると思います。ああ、これ持つてくりや良かつ

たな、まど・みちおさんの、私がいっぱい大好きなのありますが、今一番好きな詩のひとつ、「ものたち」というのがあるんです。もしも興味がおありになつたら、調べてください。まどさんの詩は大好きな詩がたくさんあるんですが、それは、「いつだつてひとはものたち」というふうな詩ですね。どこにいても、ここにいたりやあ机といるしね、椅子といるし、そして、お風呂に入ればお風呂場があり、石鹸があり、一緒にいるんじゃないかつていう詩なんです。そして一番後

は、
たえすすべてのひとから みはなされた
ひとがいても そのひとに
ころろやさしい めのきれがーまい
よりそつていないとは しんじにくい
つていう。これね、暗記できればいいんですけども。そんな意味もあつて、本当にそれは、私にとつては、そうだよつていうふうな世界を感じるよきの言葉です。詩というのは、その良さは、そのように、まるごと一気に瞬間的に伝えられる良さですね。

「略」：おしまいに、一個だけ、「あいたくて」を。つまりなんで生まれてきたんだらうといまだにわからないことについて、思わず書いた詩です。そして今はわからないということが、たぶん楽しく生きていることの力の一つになつてるような気がしています。あと、その言いそびれたので一つだけ、言いたいのは、特に若い人に。自分の中には必ず、詩に限らないですけども、この世ですぐ役に立たないような、それでいてすごく大事なものの、それが詩であつたり、何かすると思ひますが、それは必ず入つてます。もうなくなつちやつたと、どうか思わないで欲しいですね。それは歳

とって減るもんじゃないし、是非。抱いてるなと思うだけで、いいと思います、という風にお伝えして。

だれかに あいたくて

なにかに あいたくて

生まれてきた

そんな気がするのだけれど――

それが だれなのか なになのか

あえるのは いつなのか――

おつかいの とちゅうで

迷ってしまった子どもみたい

とほうに くている

それでも 手のなかに

みえないことづけを

にぎりしめているような気がするから

それを手わたさなくちゃ

だから

あいたくて

今日は、お会いできて、嬉しかったです。どうも。

(文責 日本女子大学国語国文学会)

※講演記録(『研究ノート』第三十八号、二〇一〇・二、

日本女子大学国語国文学会)より一部を抜粋して掲載いたしました。

〔出典〕

・工藤直子『のはらうたⅢ』(童話屋、一九八七)

・まど・みちお『ぞうのミミカキ』(理論社、一九九八)

・工藤直子『あいたくて』(大日本図書、一九九二)

講演要旨

「中国はいかにして中国になったか？」

本学教授 谷中 信一

そもそも「中国四千年の歴史」とか「中国五千年の伝統」などということが言われるが、この場合の「中国」とは一体何を指しているのか。「中華人民共和国」としての歴史はようやく半世紀に過ぎない。統一国家としての秦や漢が生まれたときから数えても二千年百年にしかならない。では先の「中国四千年」とか、「中国五千年」とかというときの「中国」とは何か。「中国」は一体いつから「中国」になったのか。本当に四千年も五千年も前から中国は存在していたのだろうか。存在していたとすればどのように存在していたのであろうか。要するに中国はいかにして中国になったのだろうか。

(1) わが国における伝統的「中国」理解とはどのようなか。

なものであったか？

われわれはこれまで「中国」を“丸ごと”概念的に認識していた。つまり歴史的地理的実在として見る視点が弱かったということであり、その意味で「所与としての中国」(子安宣邦)として認識してきたのである。

しかしよく考えると、“中国”の正体はそれほど自明でもなく、単純でもない。なぜなら、“中国”は、多民族・多言語・多習俗、ひいては多文化からなる世界(ワールド)であるとさえ言えるからである。

つまり中国は、元来は多様であった世界を強力に一つにまとめ上げることによってできあがってきた歴史的事実なのであり、ただそれだけではなく、一定の理念(イデオロギー)を共有することによって、その長い

歴史の中で「中国」として形成されていったのである。

(2) “中国”という概念はいつ頃できたのであるう？

いくつかの文献によると、「中国」という語は、西周から春秋戦国時代(BC12世紀〜同3世紀頃)にかけて既に用いられていた。

主な文献から「中国」の用例を検索してみると、決して多いとはいえないものの、その意味が少しずつ変遷していることがわかる。もちろん現在の「中国」とは大いに異なっていて、その最も古い使われ方は「中域」(「周の王都の付近」ということであつた。やがて拡大して中原(黄河中流域)に位置する国々を指すようになった。それが変化して未開野蛮国に対して文明国あるいは文明の地を指していうようになり、さらに中国≡天下≡世界というように一層拡大していったのである。

(3) イデオロギーとしての“中国”

“中国”という言葉に特別な意味を与えられて春秋時代の歴史書『春秋』の解釈書として登場した『公羊傳』という文献では、“中国”が“夷狄”と対比的に扱われ、“中国”を優位に置き、“夷狄”を劣位に位置づける。こうした言説が生まれる歴史背景に、いわゆる“夷狄”の実力が“中国”を凌ぐほどに強力になっていたことがある。つまり、言説(イデオロギー)としては“夷狄”を劣位に置きながらも、実力ではかえって“中国”の方が劣位に立たされる時代、いわば国際化の時代が来たのである。

(4) 華夷の相克・混淆の中で育まれた中国文化

黄河中流域を中心に黄河文明が発達したのは新石器時代であり、この時代は、周知のように、他の地域、例えば長江流域などでも、それぞれ独自の文明を築いて自らの歴史を形成していたのであって、黄河文明が

唯一の文明であったわけではない。

例えばその後には春秋戦国時代に数多くの思想家を生んだ齊・魯の地は、春秋時代に入っても、夷族との関係は依然戦争と平和が交互に来る状態であったが、こうした対抗関係が解消されて、やがて華夏(諸夏)を中心とする国際秩序の中に夷族も組み込まれていった。そのことは、一面では華夏(諸夏)の圧力に抗してあくまでも夷族勢力として独自の世界を持ち、固有の習俗を守ることが事実上不可能になったこと、また華夏勢力との交渉の深まりは、彼らとの融合を余儀なくされていったことを意味する。

(5) 文字が作りあげた中国

漢字の歴史が甲骨文字に始まり、青銅器金文に受け継がれ、秦の始皇帝による天下統一に伴うさまざまな統一政策の一環として文字統一(篆書・隸書)が実行されるまで、漢字は、各地に伝播し、それぞれの地域で独自の特色ある発展展開を見せていた。

春秋戦国時代、文字はさらに広範囲に用いられるようになり、地域ごとの個性はますます濃厚になってきた。それらの文字は「戦国文字」「六国文字」と言われ、近年では南の大国楚が用いていた文字が陸統と出土しており、戦国文字研究が活発化している。

さて、「中国がいかにして中国になったか」を考えるうえで、興味深いのが長江中流域に栄え、後に中国の南半分を支配下に置くこととなるこの「楚」の存在である。

「楚」は古くから長江流域に君臨した大国であり、この長江流域に生まれた文明は、五千年の古さと、それを裏書きするような高い質を持っており、北の黄河文明と十分に拮抗しうるものであったことがわかってきた。にもかかわらず、やがて長江文明が黄河文明に飲み込

まれていったのは、黄河文明は文字をもっていたが、長江文明は文字を持っていなかったと言う一点に尽きる。

こうして中国大陸は、殷人が発明した文字を共有することによって、殷王朝が亡んだ後も、周王朝以来一貫して各時代・各地域が生んだ精神文明を共有する端緒を掴むことができたこととなった。このために中国各地はそれぞれ異なる文化の中で暮らしてきたにもかかわらず、文字の共有が多様性を内包しつつ政治的統一を可能にしていた。

もしも漢字のような表意文字がなければ、「中国」が今のように存在することはなかったのかもしれない。

〈報告〉文学散歩(平成二十一年十月十五日)

皇居東御苑三の丸尚蔵館と出光美術館へ

永井 幸子(新1回)

一、尚蔵館 大手門を入り五十米程の所にある瀟洒な建物。平成元年皇室から美術・工芸品を多数寄贈されたのを機に、これ等の保存管理と共に、作品の調査、研究を行ない、一般に展示公開する施設として平成五年に設立。小野道風の書写本を始め、藤原行成の「粘葉本和漢朗詠集」や「春日権現験記絵巻」、狩野探幽「源氏物語図屏風」等、数々の名品が収められているので、その何れかでも鑑賞できることを期したが、今年は天皇御成婚五十年、御即位二十年を記念しての特別展が開催され、その第二期として「御即位・大嘗祭ゆかりの品々」を見学。大嘗祭は、即位後はじめて行われる天皇一代に一度限りの大祭。国の繁栄と安泰を祈られる。而陛下お召しの純白の帛御装束が印象的であった。

皇居は都会の中心にありながら緑豊かな庭園に囲まれており、四季折々の樹木、植物が繁る。月金を除き一般開放され、散策を楽しむことができる。尚蔵館周辺の十月さくらや、黄色い実をつけた「かりん」の実に、やすらぎを与えられた一時でもあった。

二、出光美術館「芭蕉(奥の細道)からの贈りもの」をテーマとして開催。奥の細道は申すまでもなく芭蕉が元禄二年三月江戸を出立し、白河の関を越え、松島、平泉を経て、出羽、象潟に寄り、北陸を経て、八月下旬美濃大垣に至る約六百里、半年にわたる紀行文である。芭蕉はこの旅で各地の名所旧跡を訪ね、土地の人々と興行した句会での連句、俳文等を記した懐紙や短冊類、弟子たちに宛てた書状など、多くの仮名書跡を残している。芭蕉生涯の作品群から、仮名の書風の変遷を三段階に分けて紹介している。第一期「深川草庵の芭蕉」延宝末・天和期から貞享前期まで。第二期「漂泊の詩人」多くの旅を重ねる貞享後期から元禄四年前後まで。第三期「軽みの世界」元禄四年以後、元禄七年没年まで。この中で最も優雅で美しい第二期の作品群は五十余件を展示。芭蕉の古筆を思わせる素晴らしい流麗な筆の流れを堪能し、その魅力に迫ることができた。

二〇一〇年四月三十日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

〒112-8681 東京都文京区目白台 1-18-1

日本女子大学 日本文学科内